



和訓栞

祢乃之部

廿三
廿三至

津田文庫
文庫 1
1604
20



あとの御名の根も同義なり ○福と人の名よむむいえるはと音便して福と
 るるなりと云ふ ○峯と福とぬらぬらと云ふの畧なり ○万葉集抄に古語山
 と根とぬらぬら根山尾張國也俊賴家集よるも高根富士の福筑波福甲斐
 う福の義也 ○古語の意よる古今集よるも高根富士の福筑波福甲斐
 るも古事記の字よる也 ○万葉集よるも高根富士の福筑波福甲斐
 てらも根の義よる也 ○わが福とぬらぬらと云ふは福たぬらぬらと云ふは福と
 ぬらぬらと云ふは福の義也 ○辞よぬらぬらと云ふは福たぬらぬらと云ふは福と
 よるぬらぬらと云ふは福の義也 ○一説に福とぬらぬらと云ふは福たぬらぬらと云ふは福と
 △福あせ 根合也昔蒲根と賞すれ其長々と福と云ふてらる永業六年
 よるぬらぬらと云ふは福の義也

あやふとぬらぬらと云ふは福の義也
 ○ふらぬらぬらと云ふは福の義也
 よるぬらぬらと云ふは福の義也 ○震する時必ず雑の音ももる音合の義伯耆風土記に震動之時
 雞雉悚懼則鳴踰嶺谷即樹羽蹙蹙也と云ふ夏小正に雉震响と云ふ餘冬序録に

野雉知雷起處と云ふなり

△福い 應對の詞に近江と云ふ福いと云ふ

△福う 源氏に猫の声と福うと云ふは福いと云ふなり

とらぬらぬら

△福え 昏商貢と埴と云ふは福と云ふは福いと云ふなり

○羽判の方言に煮ゆる福と云ふなり

△福を 根緒からり又今の氏姓に根尾あり根尾城の美濃也

△福ぶ 万葉集よるも神代紀に所望又願と云ふは福と云ふは福いと云ふなり

めりと云ふ及ふ也靈異記に願も云ふなり ○期限期約の期も願ふは福の意也

○新撰字鏡に福又欽も云ふは福の義也

△福ぎ 日本紀に祈と云ふは福の義也

ふ福宜も祈と假名出と云ふは福の義也

は福義も云ふは福の義也

神主度會神主是也と云ふは福の義也

天文の比の我母の林宜氏あり儀式帳より林宜氏无絶事とも大神宮林宜氏荒
木田神主等と云えり又林宜神主首名忍人等始叙爵為天平廿一年の先規
録より也○神ハ神宜のてりいりいり諺有朱子の説は後世人心奸詐之甚感得奸詐
之氣微得鬼也燕巧と云えり○万葉集にたけなひと云く秘をたまひと云ふは
旁の云也其意豊後風土記に云えり初と云通り鴨長明の云
秘と云ふ名と云ふと云く干と云ある秘といはるまういん

○葱と云ふ本名にて根を賞するとの云と云て根葱といふ之和名故に文
葱ふゆと云ふは葱といふ根深の云也禁裡女中のり大根と云
秘と云ふ 日本紀に勞字慰勞字ふと云ふと云り○雄略紀の慰禮國と秘と云
ふと云えり大なる諺に慰れハ百濟の旧名なりと云東國通鑑に云えり
通證より考へていぬると云ては云ふ

△根ぐさ 埒と云るもの寢座の云○根ぐさ髪といふも髪といふ○根ぐ
らの雪といふは白く毛の落るると云と云○伊勢多氣郡に根倉村あり
稻倉の云式に櫃倉神社と云えりも根倉の誤なり根倉物語といふも

根ぐさ髪 髪と云るもの寢座の云○根ぐさ髪といふも髪といふ○根ぐ
らの雪といふは白く毛の落るると云と云○伊勢多氣郡に根倉村あり
稻倉の云式に櫃倉神社と云えりも根倉の誤なり根倉物語といふも

△ねけ 日本紀に揺字と云え又抜取と云るなり古事記に根こいと云えた
と云根りとも根りともいふ

△根こい 日本紀に揺字と云え又抜取と云るなり古事記に根こいと云えた
と云根りとも根りともいふ

△根こい 日本紀に揺字と云え又抜取と云るなり古事記に根こいと云えた
と云根りとも根りともいふ

時係の金華猫也麴麴香猫ハ靈猫也といふ○諺に猫根性といふは此

貪欲は匿し外に露をぬ者ともふ○土佐國よふ山あり大山也多く猫住
く樺人とあり得しといふ是は昔の事なり○蘇州の猫は乳を藏しけり諺に説
花の君子、愛く虎豹、愛く乳と云ふなり○猫はあつらふ所なく今婦人といふ
草枕草帝といふなり○猫の二歳うく死すといふ思はれて母の乳は毎夜吸く
る○事奥州白川に有又安化に事江戸あり○秋の事かひの鬼といふあり
本草に今南人犹呼虎為猫といふなり○猫は堅魚節ありけりといふ諺に後漢
昏の使、餓狼守庖厨、飢鬼牧羊、豚といふなり○猫は小判をさるるといふ諺に
野客叢書に對牛弹琴といふ類也○但馬美父郡の一村に猫がといふ使といふ
社あり農家蚕を養ふ節に必其使がせて籠に閉り其使の猫は社前の一拳石
と持帰也謝といふなり又一拳石がたふしとて小石五壺の如しといふ○尾の短と
猫は東鑑に五か尻といふ今東國の牛房尻といふ其訛也土佐國といふか猫
といふ○猫の眼は十二時ばかりの鼻は夏至の一日あつたりといふ又腕はといふ
面は洗ふ時腕手と過さる不意に客來と西陽雜俎に云ふ眼乃秋晴ばとて
知す

六つ九つ四八匹すは五と七と玉子なりまぐ九つと汁

○猫嶋に加賀國の沖あり今昔物語にも○猫間齋院に高倉院皇女範子
内親王也

猫ごめ 根ごめといふ意也後撰集源氏物語ありといふなり

猫ごめ 和名杖の懲といふあり諺言也に注せり新撰字鏡に鷹もといふなり或

猫ごめ 哈嚙といふなり○思ふ事と痛言といふ諺あり異聞録に韓昭度と棠溪公

と事と謀るに夜必と独寝るとと勤心諺言といふ妻妾の漏ひ事を慮るとあり

猫ごめ といふなり

猫ごめ 猫搦といふ竹簾にさるやと物へといふ類昭説に云ふにけり

猫ごめ といふなり○加茂より奉承といふ又懸鞠の御掟といふ

猫ごめ といふなり○今も田舎の林に猫ごめといふ木曾路に云ふ

猫ごめ 筵の如き物といふなり

猫ごめ 宇治拾遺に猫ごめをたまひりといふなり後漢の事なり

猫ごめ 根の事なり○源氏の人種の姓の事ともいふの根ごめといふ○首をも

くよ菅家万葉

さえつた先根刺とくわむと書海と竹の園生とくけまふうぬ
是ハ孟京ノ故事トヨキリ

孫ざを

孫覚とくちうらひて目のさむるあり定家卿

ひうたふ孫ざをの室よきくんりうらぬ月のまうり

○孫ざをの孫孫ざをを多の救くと孫玉集とあり○孫ざをの里ハ義濃惠奈郡
あり麻覚の床ハ絶景也仙境とて浦島ノ故事とくわらふう一孫崎の本曾越
山さやハ孫ざをの床のさひーれよたを音あふたまうらぬ
とらふやハ世取のよせまやとらふもはらうとらふ西之帰とらふ孫崎の幸孫雲といふ
俗諺もとも信一む一辺衛攝政公のチ

谷川の音よゆたもむすうと孫ざをの床と誰名はまきん

薩州ハ孫覚氏あり平維盛の子六代年長とて子あり清重とらふ其裔也とらう

孫ざを

源氏ハ元四年三月とて正五九月六舟日といふやとらう長祚約ハ修年

三舟戒とんゆ

△孫ざめ

根台の不成一ハ大隅の國ハ大ぬどめ小ぬーめとらふ山あり

△孫ざと

倭名抄ハ鼠ハよあり竊盜の不成一ハ人の寝て後よよくかく物と盗食ふ

もの也増韵ハ虫似獸法苑珠林ハ鼠盜竊小獸夜出查匿とてえとらう子鼠ハとらう
とらう羽列ハ鼠ハとらうとらう○白鼠ハ福とらうハ太平廣記ハ金玉之精とらう日本
後紀ハ山城國猷白鼠とてハ今ハ甚多とらうと色あり斑あり黒色あり光仁紀ハ
之ゆ○川鼠ハ水鼠也水底泳く才魚の如ハ水鼠あり北方ハとらうと葵菜食ハ
鼠あり西域或ハ南海火州とくわらう野鼠ハ偃鼠也野菜根を食つと鼠鬚筆とらう
とらうとらう鼠とらうとらう安永丙申の復伊勢安濃郡の村里ハ鼠多稻穂のとらうと喰
切とらう長田鼠ありとらうとらう竹鼯也玳瑁鼠ハ鼯鼠也大鼠ハ碩鼠也大坂肥後藏
大鼠ありとらう猫三匹ハ喰ひ殺せとらうとらう黄鼠ハ鼯鼠也鳥鼠同穴山の鼠是とらう
とらうとらう麝香鼠ハ香鼠也長崎後藤町ハ此鼠とらうとらう住昔暹羅船来時ハ附来
とらうとらう梁各ハ倭國有山鼠如牛とてえとらう安永乙未の冬ハ美濃とらうの辺ハ
大鼠如大もの出とらう安藝國ハ六足の鼠あり○群鼠海ハ渡とらうとらう夷堅志草
木子ナとてえとらう日本紀ハと記せり○永正四年ハ武藏相模ハ鼠多とらう形蝦

蟻は似く尾ふ一立穀派管一木根成堀と云ふより豫州の龍嶋あり大なる窟ありて田畠と堀か一人家と禍とありて民人住事ありつす是は駝の皆海中に入らし也○ぬき扉の壁ももろくもろく○関西のそこの名を呼遠江と云ふ

孫とまひ 扉の元より出入りしつて引つてかひてとまひをいふ漢音より音韻兩端とらふとて馬とつてとまひといふ

孫すみり 和名按し指とどかんとしつて功程式は鼠走と云ふといふ孫すみりといふも門樞之横梁也桁より屋中一結附くもの也

△孫せ 根麻の糸也神宮のあり細木はたりあり物次結し物といふ又倍の重厚簡嘿ある人波譯名と孫りとの略とや孫つとらふとらふとらふ

△孫ぐ 床の下に横木といふ根採の糸とや矢ありは孫ぐ巻といふも孫同延喜兵庫式は太刀と造るは分集合集と云えて集と孫ぐと訓せ

孫ぐが 又まれの稻把の上略ありといふ或は渡又根東ありともあり

孫ぐひ 媚嫉といふ日本紀は妬又慨憤ともいふ宿痛の衣宿憤の意あり古

今集は孫ぐといふも壘異記は惻といふ又慷慨といふ新撰字鏡は惻と孫ぐともいふとらふとらふ○杜詩は不分桃花紅勝錦といふ古来不分と孫

いふふと訓せり桃花は我分劑と云ふぬきといふ音萬は嫉花と孫ぐめりて孫とよまら

孫ぐま 欲憤の意也日本紀は嫌もよまら○新撰字鏡は故と孫ぐけふといふ

△孫ち 鉄炮の具とあり鉄錯ありあり 源氏に孫ちけといふ心ぬくと云ふ孫ちける孫ちきふといふ皆柳度の意也

孫ちふ 熱よりなる詞とや源氏に孫ちのさうやくといふ極熱草藥也といふ○孫ちやくといふ俗語と熱脈といふ

孫ちる 紗又捻ふといふより庚らと意糾袂といふより孫ちる金孫ち合孫ち僻めるとも也止観といふ積孫つといふも○孫ちる木は練木也

孫ちけいし 倭人といふも説文は倭巧調高材也といふ白木林良材と倭人といふも

かきし人とし書經に懐人としる万葉集よ

あつこのくわてかしの二おもふもかくも根ちけ人の友

△根づ 江戸谷中よ根津権現あり是甲斐の士根津其君に諫て死とすく奉祀

す文照院君の時也大坂陣よと根津小五郎と太平記より武人の姓也信濃佐久郡
の大姓也鷹のまよと通しる者也鷹の羽と續々と根津始より也

根つゝ 俗語也涅の音に取用する成り水中馬主に注せり

根つげ 根着の成りて墜子也とらり

根つゞと 日本紀に哭泣或發哀とより誓の辭也音番の成りて或哭奉仕の

根つらり

△根てのあまけ 山腰ての朝明の成也

△根とり 森々の鳥也鶴をよみ論語に宿河よとる根鳥の枝と争つらと誓一盛

衰記よええより○根とり狩の早朝に伏る鳥は狩也とらり○吹物よらり音取
の成也

根どころ 日本紀に惟内とよとる寝所也○後撰集に根どころとらり

處の成りかたとらり○万葉集に寝所と根とより

△根あく 神代紀に啼哭とより音に泣也又鳴声を根あくともとらり

△根やう 豊後の方言老婆とらり

△根ぬふり 根尊の成り根が長く引て生ふる浮草あれは成也教よ多く寝

ぬふり寄より

△根く 東路より生見沢林せり寝の成り

△根のび 正月初の子れ日野にさよとく小松と引く根は子の日と根延よとる

根ぶあよするあつ小松も又子松の成り取るる菅家文章に嘗聞干故老曰上
陽子日野遊感老とてえあつそふげよりの本あつ錦繡萬花谷に正月七日登

岳遠望四方得靜陰陽氣除煩惱之術也とて董一助答問よも葺首折松枝男
七女二以為樂飲之とええより

根のこ 源氏に根のこいつはわらすかんとええより是は源氏紫の上と新松の

夜成の日にく其次の夜へのこれ日よあつらり三日の夜の餅をせつぐの日ゆあけ
をい子のこれ餅とらり

祓のくふ 神代紀に根國と云ふところをてんね國といふてまて終
 鳥のくふも轉用なり私記に根國謂黃泉也くも又北方くす素尊出雲國に鎮
 まりぬ又髪を散し斂と握るの儀と繪してて邪と除くと稱するとの真武の事
 に似たり伊川の説に北方玄武乃龜蛇之屬後人不曉其義畫真武作一人散髮握
 劍足踏龜蛇とらり又武塔天神の稱あり武當山の事は類せり大明一統志に真武
 淨樂國王太子也志除邪魔云々遂越東海遊覽又遇天神授以空劍入武當山脩
 煉云々奉帝命往鎮北方云々武當山一名大和山と云へり

△祓の 古事記の致しきくく祓のくく意也万葉集よふりいといま
 とそ祓の又君の手といまてまて祓の類也

ねいふ 練張の不成一土の祓りるの埴也徐廣曰埴黏土也○髪のねいふの埴也輟
 耕録に髪黏曰埴く云えり本草元患子の條に味辛氣埴とらり○痰の祓
 りるの糲粘く云え飯のふ祓の糲飯粘く云えり

△祓ひ 越中國郡名婦負をよめりる祓ひを畧せり名倭名録よふ
 祓ひとら 夜の九時の比也よて真名伊勢物語に夜半とちり一時と四つとちり登

夜十二時と四十八刻と是惠遠法師の蓮華漏のつとらり天智天皇の
 製造一多し漏刻の法も此よてせたまひり

祓ひやく 人のくふりくぬりとらり或は調字とよめり盛衰記に祓ひやくの
 やせくちる意也紫式部日記より祓ひやくと云え源氏に祓ひ人又ゆら
 ふし祓ひたれと云も

△祓ひる 睡眠とらり寢經るの不成祓ひる詞も源氏枕草紙よ云え
 る祓ひるの同

祓ひる 紙とよめり練觸の不成一新撰字鏡に繕又割もよめり関東に
 ておまるといふ

△祓ひ 寢枕る也祓ひやける意也著聞集よ祓ひけて云えたり

△祓まる 祓ひるをかくもり下学集よ曙とよめり羽列と居とらり奉白集よ
 小田原詞よらり東奥にて祓まるも祓まるといふまると助諸とらりまゆり

あしつら

ひまわり

子祭の月十月甲子日、大己貴命と名るとり大國主神ともい
 とて世々大國と稱す又大己貴の音轉也出雲より出雲の山方子位にあ
 る且古事記の負袋の説より扉の事より据ふる一禁中にもあり一湯湯殿
 記よりえり禁中行事にも十月子祭大黒天神とある禁中にも豆飯と依り
 四辻敷奈内あり一和琴と弾せり一内々行事より子祭供物黒大豆飯生小
 鯛豆腐汁海鼠鱗二俵大根いづれもかりけり入足打の臺のすくも日吉密記鼠
 官の下に此神以子為使者故名也今人家大黒神是也又大黒天神ハ梵語摩
 訶歌羅神南海寄帰傳より状坐把金囊却踞小牀一脚垂地每將油拭黒色為形
 と見え三面大黒ハ聖寶藏神經より宝藏神身黄色二臂三面頂戴宝冠云右手持
 海貝子左手持鼠囊と見え今鼠色の袋と書るも是なり日蓮説より每甲子
 日以生黒豆百粒可祭之と見えより按するより豆も神代紀より忠誠とすめり訓せり
 より成り大己貴の事より出り琴の事も此神の事なり旧事紀よりえり
 今の神像日本の風依りて梵天の形像あり況や被瓊の神像よりありてハ
 梵天の像と大己貴と名るとや○俗に梵嫂と大黒と稱するも寐まつりの名と見え

あま

ひまわりのつき

十七夜と立侍十八夜と居侍十九夜と臥侍二十夜と寝侍とありて廿日を
 古来廿日の月とありて風の雅集より前大納言為兼の

夜かしのつきひまわりの月のつきとありて廿日のつきもあるとありて

又うつ物語より二月廿日よみ満て云々ありて廿日のつきもあるとありて

とありて云々

とありて云々

是其證明也一説より廿日とありて續古今集より坂上是則

寐く侍り廿日の月れり云々ありて云々ありて

又後鳥羽院位よりありて云々ありて侍りて廿日の夜のひまわり出

けりて程多先作られり云々ありて法親王

とありて云々

されり是則のつきてありて廿日の月とありて法親王のひまわりの月の

とありてありて十九日とありてとありてとありてとありて

△根みぎさか

寝亂髪の義也文選に蓬頭とよみたり

△根んよ

年預と云う内裡式に之を釋日本紀に之を大藏省年預申狀と云ふなり格式等に其年預云々といふ事あり後名目と云ふなり

△根んぐ

年貢の字杜氏通典に之を清康熙帝壬辰令減下して三年の皆十五省として年貢其半減せしむるなり

△根んき

奴婢減つふよふ年季と云う幾年季といふ一年と一季半年法半季といふ古季禄といふ事あり一は名ふこと一是西土といふ買僕質奴の類也永年季ハ御停止の事也○年忌といふ事ハ我國史に之を以て他の三教の各もこれ僧瑞溪一切経考にて經中年忌服忌の事ふ一儒法假て用うみ形と云ふといふ小祥を一周忌といひ大祥法三回忌といふ但十三年忌ハ國俗の説方々事元享釋各に之を新後拾遺集に之を又云くいさう故有幸ふく櫻町中納言其父信西の十三年忌を修せんといふ一と其弟高野の明遍徒いさうき況や月忌といふ明文ふ一唯先支那近(追慕)寓と云ふの禱餘套稿に之を三七の年減りて追薦するに聖佐太子より起つてあつて心得

△根んごん

神代紀に慇懃と云うなり根もごんの轉と云ふ也至心を云ふ也一は又和南と云ふもといふなり一真名伊勢物語に鄭重ともよみたり又苦をよむに辛苦の意より粘りたる訓より童蒙頌韻に云とよみ靈異記に叩もよみ又或ハ曲ともよみたり

△根んいまる

根も入ていまるを以て根もごんの意ある一合入と云ふなり

△根めふ

日本紀に以汝之根入我根内といふ語あり俗に瞳目の意に云う根めつけふといふ

△根もごん

慇懃といふ万葉集に丁寧も惻隱もよみたり苦の根の根もごん草の根の根もごんといふ根のての意如字と古語に云うとよみ情實の懇々たる所の根のめあるはたしむる苦字とよむも意同し靈異記慇懃と根もごんよほめてとよみ○今の俗に恭敬と慇懃といひ詳悉と丁寧といふ○根もごんぐふといふ根も疑とての義より根毛一伏三向疑呂ふと云う○伊勢物語の心も根もごんといふけふやと云ふ真名本に心も不被儼ける間と云う

△根や

靈異記に根と云ふなり真名伊勢物語に寢室と云う臥房又密室も同し

倭名抄に「根殿」も有り下巻にて小座に「遠江」にて「根矢」の義
 もあり越後國矢浦の海中に圓うまきくも百餘間の大石ありて根矢の鋒立と
 名く○土左の口語の結末は「根や」と有り○神宮の詞も有り○「根やのひまき」
 は「根や」のひまきの義なり○「根やのひまき」の義も有り○「根やのひまき」の
 義も有り○「根やのひまき」の義も有り○「根やのひまき」の義も有り○
 さて物おりの「根や」の「根」は「根」の義なり○「根」の義も有り○「根」の
 義も有り○「根」の義も有り○「根」の義も有り○「根」の義も有り○
 比の夜の「根」切の侍り後拾遺集増基法師
 きの夜の「根」切の侍り後拾遺集増基法師

今此歌「根」切の侍り後拾遺集増基法師

多くある侍り後拾遺集増基法師

根やと 根字埋字ふ「根」有り今根殿の意也新撰字鏡にも見えたり○盒麵

か「根」盒麵と「根」やす也

△根や

△根よげ 伊勢物語の「根」よげも「根」よげも「根」よげも「根」よげも

名本に見え根と兼有り源氏総角は琴教たる所も此辞あり音と兼有り万葉
 集にも夏草の相寝の瀬と見えたり

根よとのかひ 万葉集にも見え「根」よとのかひも「根」よとのかひも

の鐘也

△根とと 調練の意らしむ也

根らふ 万葉集にも見え「根」らふも「根」らふも「根」らふも「根」らふも

同し史記に良與客祖注に伏伺也と見えたり 埃囊抄に窺と有り「根」らふと

不通なり日本紀に練と「根」らふも訓せり万葉集にも「根」らふも「根」らふも

らふのみちり懸字に倭俗の造る字也

△根らぬ 練貫とあり生の糸と経と練とる糸と緯とて織たる絹とらふ

野宮殿の説也「根」らぬも「根」らぬも「根」らぬも「根」らぬも「根」らぬも

より侍りて大津練貫と庭訓にも載たる此名水に据りて豊大閤茶の湯の水は

毎日系(汲)きられしと續けしと「根」らぬも「根」らぬも「根」らぬも

根らぬ 和名抄に練と有り熟絹也と注せり

祓りか祓

日本紀に鉄鍔とよめり倭名抄に祓りか祓りとも云ふ練の糸なる

○新撰字鏡に鍊をよめり練金なる一延喜式に下総國より鍊金と貢せし事
見えり

△祓り

寝ねと祓りともいふ寐も同一○茶物に煉とらひ金鍔に鍊とらひ縮

糸に鍊とらひ煉鍊練通一用う泥と祓りて埏也○徐安ともいふ田舎の供の日記

に園白西人祓りとはいつきまふる一奈良の都を祓りたが子とてえたる

により實朝公加茂のまを祓りた子とてもよめり今も祭禮に祓りとのふ

らふ是へ夫木集よ

九重よたたる玉のゆりより傾くはそこの祓りか祓り

月御長裾と曳ははす又祓りよちやぶりといはる詩の委也

△祓り

万葉集東千よるも新六帖に箱根の祓りふともよめり根のとも

らひ助け詞あり一祓の條下に詳あり

△祓り

比良の祓りか祓りふともよめり比良の嶺より湖水吹く子風とらふ也

比良の祓りか祓りふともよめり雪ありといふ

△祓り

子変神に泉別塚の南庄にあり親長記に子変御前とも或は子祀神とも

らふとも如意神祠にて神功皇后の如意珠より出る号也今在記に彦火と出見尊

ふりといふ

△祓り

△祓り

源氏より君の祓りか祓りてたまふりてえり夜啼客竹とらふ也

倭訓彙前編二十二終

倭訓彙前編二十三

洞津 谷川士清 纂

乃之部

の 中の助の辞も多くらう二語を一語と熟きしむる助辞也よき之字とよきなり
 日本紀古事紀よ之字と句申語未用お美馬の如きものありて一家の体とふせ
 又之頃之の之の如しナニカニナリ所成神之者也ナリ序り又古の体の言よりらふまにて用
 の言より之といふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 之天とてえらる他も例しと観し〇播磨の平語の終よ凡てのらう京師のふよ
 同〇楚辞よ鳴玉鸞之啾々又神高馳之邈々い語助也又戦国策よ之楚
 與不注よ之猶於也とてえらる九上よ五と字と下に置時よ其中間よ之字と否是
 文法也といふ〇近江のや信濃のや泊瀬のやの類と野よ也す助れ辞也莊子よ地
 名南沛成南之沛といふ如しよきもくのあふしむる世のうし豊ふといふ山と
 かよよほけたよかつよまやたりまきよまかよあすてあとい意かりらうとい
 〇仁徳記よ磐之媛とある之も助辞也今の俗呼よも之とほけらうとの多し

論語孟之及孟子尹公之他あり莊子之驪之姬呂覽之丹之姬と見えたり○野
とよむも彼此相通ふ意ありて之字は通つるえさぬぶとらふ○日本紀は幅とよ
めり絹布の度也○筧とよむも矢の度なり一黒塗と用へ上差は水精の鑄あ
る平服より落矢まで廿一條也壺籠は七條也延喜式和名抄は笑とよありこが
のさりのぬぐひのまのふあり○字合の字は五つあると難せしれ一事あれども
新古今集は七つありて月よたわともあり

やかれのさりの木の間のまのふは落つる月の影のさやき

○のてよりまゝ緩やま袋字紙よもあふとそてつものひりりれもの才法
らふの秋の夕露啼むの才人の皆はとこまんの字甚深の意味ありといふ
あけてえぬたゞまつとのつもの才もたゞまつとあるかあれの字はくつひ
てげゆと超嶽院の所説也といふ○初五の句は伊勢物語よふのまの才二の句は
古今集よ我やゆのいとよひは才四の句は月之んそのあまのちとよと續後
撰集よええての字はくすの体優よま長き一結句の末よのちある古今集
ようつりもゆり人の心の拾遺愚草よゆちぬ月のわりのふく連人のちとよ

まのふとえはとらう○書ふにふけのむのけらあやうの秋つまのふうあふん
らの秋の夜ふとあるといふこの約信也と又譬喩の助辞は用おしもあり佛足
石の才はつひのもあれとよえともあるの詞也といふ今の口語よとあり○体の語と下
よひつくる時よのち置也秋の語は用と体よといひたすふひされ用の語
よとらう○書ふの秋の夜ふとあるといふ秋の夜を吹雪とやとかうして一節の中疑
ひの辞ある一疑いとらとある一唯又とどのてのちとあるあり蓬とよと松虫
のふくおもひ渡るとある人のちとあるとある○荷とよむにの轉語也荷前
荷持田のちとよあり○洒乃乃の假名よ用とら

△のあへ 日本紀は野饗とよみたり

△のいぬ 野豹の才也○犬蓋のまよふれて野に在て人と魅するともいふ病

源候論は野道と見えたり

△のいすゞ 倭名鈔は肉刺成よありのいこのぎ也芒刺をいすゞは墨也刺字意

也由着靴小相措而所生也といふ今いすゞとよみたり

△のう 神佛の事より以下方の能ある事成つてて舞とらうとよみたり能

いかつふさる鷹をいふとらう秘鷹傳の注よ鳳輦の左の隅の柱はめく
つらふとる事延喜帝より始りて御鷹と合せりたため是次のとらう

△のこ 退去の意ぬけるとらう新勅撰集よる事よ人のむのこ
よてとらう軒端と人のむのこむれのことらう武烈紀の手よのことらう
よらう

△のげ のこ信語也
竹取物語よえ仰様の系成一のけよたつてふらう
枕草紙よのけよひまらんとそものけえりばらふらう

△のこ 残れよりのこと今残也各経よ貼けよ新撰字鏡よ餃よよ
○のこ菊のこ雁のこよらう菊のこ雁の常世の鳥たれ也佛
足石れ秋よのけよんよと遺跡のこ也○残れ筑前早良郡の
これ浦よらう朝野群載刀伊国賊の太宰府解よ那珂郡能古嶋よとらう
後蒙古と據らう

△のこ ぬふよ同新撰字鏡よ雉よとて也注せり靈異記よ捫よよ
拾遺集よ

△のこ 残れ夜也曉といつ夜のれも同夜とす目さく夜の明
ぬ意也

△のこ 母名抄よと評してのこらうのこもらうのこもらうのこもらう
をの揚の意のこらう大諸礼よものけよとらう

△のこ 太神宮式よ調荷前よとて祝詞よらうのこもらうのこもらう
萬葉東人の荷向篋の荷の緒よ是也江次第注よ荷前者四方国進御調荷前
取奉故曰荷前よとて○續日本後紀よ歲竟分練号曰荷前よとて私記よ
先祭神祇号相嘗祭後奉山陵号荷前也十陵八墓よ幣帛とらうのこもらう
朝野群載荷前幣物請文よ山陵七十七處墓三十六處近陵十處とらう
是崇徳院二年の制ふれ時代よよりて其異あまらう一貢物の荷の
とらう

△のそ 較と播州のそとらふ又のそ鯨と称するあり鄙俗にゆゑ過る性質の
人故のそんといふ○まろこ鯨と相似し

のそく 除とよめり去退の義あり日本紀に蠲消とのそくぬしとせり
さ也兩居友よもええより○規とよむ臨眺の意なるア中務集に池よのそく
たる松よ菘のゆりるとええ源氏よ水よのそくたるええもええより圍基よのそく
觀字也○出羽よのそくといふ淡黄也又さのそくあり及はとせり

のそむ 何とのそむい望也何よのそむい臨也其時よめりさのそむも古語あり臨産
の如く靈異記よ伴とよめりとのそむも新撰字鏡よ規又願もよめり

△のだ 野田也新拾遺集物名よのどろるまづとよめり西土よ野田といふ
野と田と二頃也

のどろち 野太刀とせり埃囊技よあひとらふとせり異体よのどろち
とアえより倭名録よ短刀ハ刺刀也とて訓せり物の後代よ打刀腰刀とらふの
類らふ螺蛸時繪等の野太刀とらふ物或い平鞘或ハ毛抜形或ハ草緒或ハ
衛府劔シチとらふ是より東鑑よら武の太刀とれとらふは東略按よ武家

△のい 衣冠の時野劔或鞘卷の劔が帯せり参内上殿の節に殿上の口
解劔のよ也といふ今軍家よら常の佩刀よ大よ長くて刀量ハ人
の提らぬ也大太刀とせり長太刀ともいふ物よ軍中よ兩刀の外背よ負とせり
いす武備志よ大制といふとらふア○のどろちら俗語ハ草木とらふて
野のそ成

のそまろ 宣字曰字とせり新撰字鏡よ諭とよめり神諭ふとせり
とら告たまふの略也のたまふこといふい反ふ也のそまろとよむい急語○
大殿祭の祝詞よ宣志久とあるいのそまろとせり友す也

△のち 後とよめり物よのちせとらふも同○天子と称とらふ後字と
用かへ後一条院以後の例也院号ハ冷泉院より已降也○神代紀よ苗裔と
よめり今もいふ語とせり後流也○寛平熱田縁起よ日本武尊随逝水時年三
十仍号其瀨曰能知瀨能知者命終之詞也とらふ○のちせのい若狭り
あり

のら 野路也名所よら近江狼川の邊也野路の玉川也路の條原ふと

ええり

のちみつき 閏月とよむ日本紀とるえり漢書と後月とるえり○九月十三夜ともいふ仲秋の月と同じく勢ふともて中右記と保延元年九月十三夜今宵雲清月明是寛平法皇明月元双之由被仰出仍我朝以九月十三夜為明月之夜とるえり躬恒集よ延喜十九年九月十三夜との宴せよまたまふりといふ菅家文章秋夜の詩と九月十五日と注す北野縁起よ九月十二日とゆる或の説よ源氏夕霧の巻よ十三夜の事あり一系院の時より始る金葉集以後多しす鄭女谷何大後と詩と九月十三夜と賞するものあり明十二家詩とるえりといふされ何大後と集とるれ八月十三夜の詩也田家四時占候諺語と九月十三時針靴掛断繩といふまふり月見の事いふけと晴と期する者ありとるも家隆と

△のつら

神代紀よ野槌とるえり草の神靈といふ也○本朝文粹村上天皇御製古調詩よ又有異跡者名号為最明野鏡誰得辨蝦墓尤耐驚とる

ゆ新撰字鏡と蠍と訓せり又蝮とよる或い山深とよ碓の如き蛇ありとるも野槌といふ伊勢にてのつらともいふ何よとも音と聞ていふすよりやあは足ふけをいふと熊野の山よ多し人と整せば傷腫すよと杵火と焼けい其音いふ集りて火よ投し死すといふされ蝮と訓とる成といふと碓石集よ深山の獣の名とる○下野の国よ天麻とのつらといふ

のつら

祝詞とよるる宣言の事也古事記よ詔戸言万葉集よ能里等其等とるもと略してのつらともいふ中臣校よ天津祝詞大祝詞とるえり万葉集よもふのつらともいふ業資王記よ祝詞者祝彼神德告此敬意也といふ神祖の詔賜し御言と兼て兎屋命の宣申す也今集解よ中臣宣祝詞者時行事宣参集之社に祝部等也といふ神代のみまの傳ふれ天津のつらといふ道饗祭鎮火祭ふとも此詞あり同○明月記よ祝僧とるえり北野といふ

△ので

△のど

俗語也野手のさふり
 萬葉集よ和字とよるる聖武紀宣命よものどい不死と云とるえり
 ○俗よのつらともいふもさふり

△のぬ

△のぬ 板ふしの林とるの土佐國安喜郡上野根とらふ所ありて薄板と云

△のろ

△のろ 野宮也齋宮よ立たまりんとすまふしやん也式齋内親王奉入

時の祝祠よも三年齋の清まりてとる也初齋院よ一年野宮よ二年

江次第難波三所野の宮とる也今一所野の宮也伊勢の齋宮の姓は

ハ差城の有栖川よあり賀茂の齋院の野宮ハ紫野よありとる源氏賢木

の巻よ委良刀自神とる也今伊勢度會郡奈良波良神社とらふとらふ今伊勢齋宮の

跡よ野の宮あり○藤原公継公と野宮と稱す

△のろ 文選よ嗶呻又軒言とらふり真名伊勢物語よ旬言と填る廣韻よ大色也

とる也今の俗高聲とらふ意也罵知の義よや新撰字鏡よ聒とらふり或ハ嘔字とら

ふとる字とらふとる篇海よ嘔ハ熊虎色也とらふりハ是とらふり或ハ詔とらふ

△のろ 延の義とらふ及ぶ也のむとらふとらふとらふ及ぶ也

△のろ

△のろ 野原の義也野ハ阜ハ原ハ高ハして曠平なるがら也万葉集よ高野原

とらふり○神名式よ笑原とらふとらふり

△のび 古語拾遺よ野火とらふり藝林伐山よ縱火焚其草曰野火とら

る也又焼滅よあり○燐火とらふり義同ハ北海のたて火湖水のまふ火東寺繩手の宗元

火伊勢阿濃の九体火ふとる也原路神の火とらふり同○蒼鷺朱鷺カノ羽

の光も火の如くもありこの樹上よあり○伸とらふり身とのびと名目よ

呼とらふり屈伸とのびかたとらふり

△のび 延やうの義也悠々の意也日本紀よ漲遠とらふり○聖

異記よ鄙とのびとらふり

△のぶ 弘字伸字延字とらふりつとらふりとらふり及ぶハ陳展申暢序述宣

布の表名皆同一又のぶと通つ○信と名よのぶとらふり伸と通する故に順ハ

易の順信の義ハとらふり言ハ述の義也○備中ありりのぶとらふり木ありとらふり魚

と酔とらふりとらふり木とらふり魚と探とのぶとらふり木ありとらふり魚

△のぶ 野伏の義ハ伏とらふり意同ハ拾遺集よ健字法師佛名の野ふとらふり

まかりもく待りると見えたり

山休もねむりもかゝるるなりやと移りの移やを成しに

○主あまの兵とらふも兼同

△のぶ

野邊と申り○文屋康秀くくかゝる秋の家集古今集序ホよハ申

とありて古今集秋下巻頭よハ秋の載らしり昔の嵐をハ秋の季ハ秋よあり後

京極殿縣中嵐とらふ類と申りハ時各雜の秋ハよむなり定家慈圓むり

秋の秋をよむりハ尋りハまづハ

△のふ

登字上字ハとらふりハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申り

のふすハ今登の意也のふハ延詞也ハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申り

○系(の)ハ朝延ハ就くハ分番上下の令語ハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申り

天ハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申り

のの

日本紀ハ能褒野陵ハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申り

此野と鞠ハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申り

社あり能褒野ハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申り

の

野原の青也野ハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申り

○と申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申り

△のび

古語拾遺ハ野火ハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申り

又焼ハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申り

火伊勢阿濃の五体火ハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申り

の光も火の如くハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申り

呼くハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申り

のひやう

延やハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申り

異記ハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申り

△のぶ

弘字伸字延ハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申り

布の布名皆同ハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申り

易の順信の義ハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申り

と醉ハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申り

のふ

野伏の義ハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申りハ申り

まかりゆく侍りると見えたり

山依りぬきつゝもかゝるるなりやいと侍りの秘やと見えたり

○主ふと兵とらふも同

△のへ

野邊とあり○文屋康秀とありやうの秋家集古今集序おもひけり

とありて古今集秋下巻頭よの秋の載らしり昔の嵐をい秋の季は秋よあり後

京極殿轟中嵐とらふ題とありやう時各雜の秋ふよひやうの定家慈圓とら

秋の秋をよむと尋らふもあつたり

△のやふ

登字上字やとありやうを友ぶ伸と女通と神代紀は縁もよあり

のやすい今登の意也のやうに延詞也ろふ友る也○陵巒とゆかよのやふとあり

○ふのの朝延は就くしあか番上下の令語よりかよりるも亦同又朝

天しつより神代紀は昇詣と見えたり

△のやの

日本紀は能褒野陵とあり伊勢國鈴鹿郡長世御曠野の中にあ

此處と鞠の村とあり今倍は廣瀬野とあり是く式朝明郡は鳥出神

社あり能褒野は葎とありは白鳥と化して出去ぬの地とあり此處

とすて富田と叫び鳥出と音通せり俗は飛鳥社といひ其白鳥と追尋し倭の琴
弾原は傍ると紀よ見えたりも富田村といふ葛上郡也といふり○琉球も
乃保島あり

△のやの

旗の類といふり或は幟といふり高く登とのふ也大諸禮よのやの

は乳けるま竹の本より順よつけのやの也といふれは昔もや古代の旗は手

長旗と云く竿は先は吹流の如く附といふ軍陣の時新田足利といふ

白旗ありといふ風吹て家紋見えたりといふ幅と柱ははらとて今の体

のやのといふ南朝記傳よの島山左衛門督政長より起ると見えたり○端午

のやのの早良親王より起るといふ或は足利家より起るといふ菅蒲刀菅蒲習ふ

とい勝負のふとよせといふ類各纂要は武人以端午日用武之處為穿楊之伎と為

闘勇之戯といふ見えたり○袍のふといふといふ

△のやの

儀式帳倭名抄ふといふ鋸といふのやせといふ成といふ鍋と同一新

撰字鏡は鋸錯鐵といふといふ今このやのといふ山陽道よのこといふ上列よのこ

といふ上総安房よのこといふ石見よのこといふ○こづといふといふは莫居筆記といふ

細齒鋸也といふ○廿二載逆の者の刑ハ竹鋸ヲ用ゝといふ伊勢朝明郡杉谷ニ善住房あり元龜元年ニ信長公江州宛向ニ千種越を通りしより鐵鉋ヲ打りけし者あり後に至り天正三年九月善住房汝得々刑せしふ立ふりし土中ニ埋み竹鋸を首と控せしり七日し死す

△のま 野間とあり又沼の俗語もいふ○薩摩の野間權現ハ姥媽とあり姥媽ハ唐人の船神とする天妃是也といふ

△のみ 助語といふ其意其事と他多しといふ終る語ふれハ耳爾已かといふ論語もいふ漢書の注ニ語終辭とす句中ハ管子に勿已如是とる由注ニ不但如是而已といふ句首ハ莊子ニ已而為知者殆而已矣といふ又而已耳といふ連用せり多し已馬耳と用ゝ沈存中ハ而已切音耳といふ鄭樵ハ慢色為而已急色為耳といふ爾ハ耳と相通しちる事多し○蛭といふ人の血と飲の事や○新撰字鏡ニ鑿といふ事全浙兵制同○丸の事あり堂の事あり眉公雜字ニ鏡鑿捲鑿といふ事木屑と香の事や俗ニ酒客と戲

そく左のあふといふの事といふ事也通エの具ニ鑿ハ左ニ持との事ハ飲の事ニ寄ていふ事○日本紀靈異記ニ祈とけといふ事あり香の事なり○叩頭と訓するも同意也古事記ニ能美之御幣物といふ事○出雲ノ野見郷あり野見宿禰の名の事なり也

△のむ 吞といふ事あり通エ飲も同○祈といふ事方彙集ニ乞の事いふ事あり

△のめ 咽候をいふ香門の義也といふ事 船といふ事あり温初ハいふ所以塞舟漏也といふ事

△のとせ 野も狭也といふ事○廿二載川録倉右大臣集ニんえといふ事 野中の水ニ影のうつろといふ事ハ匡房の説ニ徐君鏡ハ人の心の内と照しけし事廿二載りてやかりし是更ニ我持しげといふ事塚といふ事此故事也といふけし事塚ニ埋しといふ事鬼魄によせて舟の鏡といふ事新古今集ニ

又龍山の野百首より

圓のありよらふよ放の聲や燈のりのかえりてん

聲のうせたる時やあふせくし事ありとつり一説は飛火の聲とらひ此等の鏡とらひの峰と水とつり遠近の里數を知の法あり葺家の術也といふ

△のや

東鑑に野矢と見えたり征箭也といふ誤り野矢は檠箭也或は野箭或は征箭負ふと東鑑と見えたり○庭訓は妻黒鏡矢と見え端の黒き鏡也

△のゆ

也○近江のや石見のやれ類の語也攝津は平語の了といふ

△のよ

橋本邊の語末よりりよと同一

△のら

日本紀に野字郊野字とよりり万葉集に草字ともよりりらに取辞あり也よのらふらと見えたり○出羽のてい畠のまといふ

△のく

万葉集卷首のクの家告用と見えたり及也其次は名告佐根とありもさく及せ名のせのそ也

△のり

法則といふ告也宣也日本紀に刺字風字律字ふくとよめるも同一童

蒙漢韵に刑とよる○秋とよむ多く佛法とせり後拾遺集に

ほのまのふいけいさのりなぬあそひたりふをていさといふけ

いふもまふもけの声といひ狂言綺語に佛衆の因に白樂天といふるあり○器物の寸法に内のり外のりといふ類聚雜要に乘字と用わたり○海苔とけり

いふ莫告藻より出ると辞する一皆滑るるれといふよて堅けりの名もあり

延喜式に海菜とも見え○糊といふ海苔より出ると今も海苔の中よけりい

いふ糊の用よい○日本紀に千箭五百箭とちけりいとのりといふをり古事

記に千入五百入と作まると千篋入五百篋入のそいと略せり○名よ文をよむ藤

の文信あり義といひ藤義忠あり教といひ平教経あり御といひ紀御

因あり○血といふも糊の意あり

のり
賭弓とちり正月十八日の儀式也今とけりよのまよのりといふ詞あり

と乗字のそる一乗算といふかける也よて今うけ的といふ的申矢取会人

等矢等らり侍中群要にえゆ○獲者あり内裡式獲者毎的執白幡謂矢疎密

者といふ也よちり一成一○賭弓の賭といふ錢といふてこる是古禮也と増

鏡よえゆ

のろち 日本紀よ令字とよせり法言するの義とて又ち也日本紀よのろちとて
ともよせり又けりともいふこと又つて説文よ於文曰令為命令者使令也口者
出令也天不言亦以寐寤禎祥告之也とる也
つれあめ 法雨也梵書よても新勅撰集よ

法の雨よ我しやぬとてむりまにほほの草けゆり
是ハ法物集よ紫式部く聖言とて源氏物語と造りたる罪よよりて地獄
よ墮ちたとい一日経とてすべしと人の友よえたりとせざる名とて源氏の
故ともいせざる表白一篇も是あつて契沖らり

つれつと 倭名抄よ式部省とよせり日本紀よ法官とせり
△のふ 宣告等とよむいけづのふ○乗の船馬ふよつりよ方のふなり
神代紀よ取とよむも同○罵詈とよむ乗のふ○似とよむもふ
と通つ和名抄よ名よ近似とむけりとも俗語よ似合たる事とのつて
り

△のまろ 神代紀よ似字とよめりみろとらふ如

△のろ 稻若水の本草よ麿草とよめり人踊ばとれの見物して目放とれと
らる本草よも獵人奔米則麿塵注視とらる平調曲よ皇塵草あると此義と
のろ
烽煙とらる野狼矢のふと西陽雜俎よ狼糞煙直上烽火用之と
えらり○今よ烽子とらるのろとらり也

のろふ 咒詛とらるふ及る罵らる詞とらる栄花物語よのろく
らるもええ台記よのろひのまよ打釘於愛宕護山天公像目とらるるも
呪ひまよの神木或は佛像よ釘と打すあり○のろひ負とらる伊勢物語よ
人の呪ふ詞の負物とやあらん負ぬおとやあんとええらるる物語よとて
人のけつふくいと年よ死ぬる也万葉集よ

ますとをれたらるひつあまらるひふけくむけさる負ぬるのろ
△のろのがせ 和名抄よ暴風とよせり野を吹分るの義也颯颯とも訓せり
野とれたらるらる八月はよあつまらる山おらるらる者よとらる禮月令
よ仲秋疾風至らしむ孟冬行夏令則國多暴風とええらる疾風を訓とらる

くさう

△のお

△のゑ

△のお

倭訓栞前編二十三終



